

教育点描

懐の深さが問われる 「人間力」



汐見 稔幸
(白梅学園大学副学長)

書店に行くと一目瞭然で、近頃は何にでも「力」を付けることが流行っている。老人力、脳力、子供力、母親力、父親力……最近では鈍感力なども取り上げられている。私自身はこうした傾向があまり好きではないのだが、流れはとめどもない印象だ。好きでないというのは、人間の属性や性向、個性などを「力」という言葉で表現すると内実が単純化されてしまうおそれがあるし、表面的にその力があるなしで人が差別されても仕方がないという風潮が広まってしまっているのではないかと気になるからだ。人間を「力」という物理学的概念でとらえてほしくないということもある。

だから「人間力」という言葉も私自身はあまり使わないのだが、文科省までもが使いたがっているようで、少しはその意味を考えておかねばならない。

人間力という言葉が教育界で広がり出したのは、内閣府のもとにおかれた「人間力戦略研究会」が2003年に報告書を出したことがきっかけだったように思う。この報告書で人間力とは「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」と漠然と定義されていた。その実際は①知的能力要素②社会・対人関係力的要素③自己制御的要素からなり、それらを「総合的にバランスよく高めること」が「人間力」を高めることになると説明されていた。報告書は、日本人の人間力が「低下」していることを憂え、その原因を5つあげている。①夢もしくは目標の喪失②経済の成熟

化③時代に対応した人材育成機会の不足④職業能力のミスマッチ⑤社会的な規範力の低下である。こうした人間力育成の不首尾を克服するためにキャリア教育を拡充すること、進学経路の多様化や入試改善、社会生活に対応した学習を重視することなど、職業生活面、市民生活面、文化生活面の三つの側面にわたって提言が行われている。

ひとことで言うと、批判の多かった「学力」にかわって、学校や家庭、社会で「人間力」を育てていくという提案だと思う。「学力」といっても、日本の場合受験競争が厳しかったので、学校を出たら一生使わないような知識や解法をたくさん憶えなければならなかった。その力のうち社会で生かせるのは忍耐力と要領のよさだけと揶揄されるような特殊な能力であった。そんな力を育てることにこだわっている限り、形式的な知識はあってもコミュニケーションが苦手とか、学歴はあっても困難にあうと簡単に挫折してしまうような人間がふえてしまう。それでは21世紀に上手に生き抜くことはできないのではないかと。こうした危機意識が生んだのが「人間力」という言葉であったように思う。

気持ちは分らなくはない。しかし、元気で活発でタフな人間だけが求められている印象は否めず、引っ込み思案で消極的で孤独も好きというような内向的タイプはダメに映る。そうした人間でも私は私が好きといえる懐の深い概念であってほしいものだ。

シオミ トシユキ

1947年大阪府生れ。東京大学教育学部卒、同大学院博士課程修了。東京大学大学院教育学研究科教授を経て、2007年4月から白梅学園大学教授・副学長。専門は教育学、教育人間学、育児学。育児学や保育学を総合的な人間学と考え、また、教育学を産産、育児を含んだ人間形成の学として位置づけ、体系化に取り組んでいる。三人の子の育児体験から父親の育児参加を呼びかけ、「父子手帖 お父さんになるあなたへ」(共著、1999年、大月書店)も著している。近著に「親子のハッピーコミュニケーション」(2007年、岩崎書店)、「親だから伸ばせる中高生の「学力」と「生きる力」」(2007年、主婦の友社)などがある。

[特集]
**「人間力」の向上を
めざして**

岡
陽子

これからの家庭科教育と

「人間力」



オカ ヨウコ
佐賀県生まれ。兵庫教育大学大学院修了。佐賀県の高等学校教諭、佐賀県教育庁学校教育課指導主事を経て、現在、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官。

1. 「審議経過報告」にみる「人間力」

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代である¹⁾とされている。このような時代を生きる子どもたちには、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、それらを活用して熟考し、課題を解決できる能力が求められる。また、グローバル化の中、他者や社会、自然や環境とともに生きる視点も重要性を増す。

このような社会の構造的な変化を踏まえ、中央教育審議会教育課程部会では、実社会とのかかわりの中で「生きる力」をより具体化し発展させるという観点から、「人間力」という考え方をういて検討を行ってきた。

「審議経過報告」（平成18年2月）では、この「人間力」の構成要素として、①主体性・自律性（自己理解（自尊）・自己責任（自律）、健康増進、意思決定、将来設計）、②自己と他者との関係（協調性・責任感、感性・表現、人間関係形成）、③個人と社会との関係（責任・権利・勤労、社会・文化・自然理解、言語・情報活用、知識・技術活用、課題発見・解決）の3つの柱と12の力を例示している。

2. 家庭科の学びと「人間力」

上記の「人間力」の構成要素の中から、家庭科教育とのかかわりの深いものを取り出してみよう。例えば、自分と家族とのかかわりの学習などに代表される「自己理解」、食に関する指導などに代表される「健康増進」、消費生活や生活設計（高等学校）の学習などにおける「意思決定」や「将来設計」、家族や幼児、高齢者との触れ合いの学習に代表される「人間関係形成」、消費生活の学習に代表される「責任・権利」、衣食住の学習などに代表される「知識・技術活用」、問題解決的な学習を通して育まれる「課題発見・解決」の力など、家庭科の学習が、3つの柱とともに多くの力と

かかわっていることが分かる。

このことは、家庭科教育における学びと「人間力」との直接的なつながりの深さを示している。人や環境と共生し、よりよい生活を創造するという家庭科教育のねらいそのものが、人の生き方に深くかかわっていることを考えると、それも当然のことといえるだろう。

また、このことは、家庭科教育の今日的な意義ともいえるし、小学校、中学校の学習を通して、子どもたちが、自分を見つめ、衣食住などの生活の自立を目指すとともに、家族や幼児とのかかわりの中で、家族の一員としてよりよい生活を工夫する能力や態度を育むことの、一層の重要性を示している。

3. これからの家庭科教育

以上述べた考え方を踏まえて、これからの家庭科教育の在り方をどのように考えていったらいいのであろうか。

具体的には、中央教育審議会教育課程部会の「家庭、技術・家庭、情報専門部会」において、次のような目標・内容の改善の方向性（検討素案）が示されている。

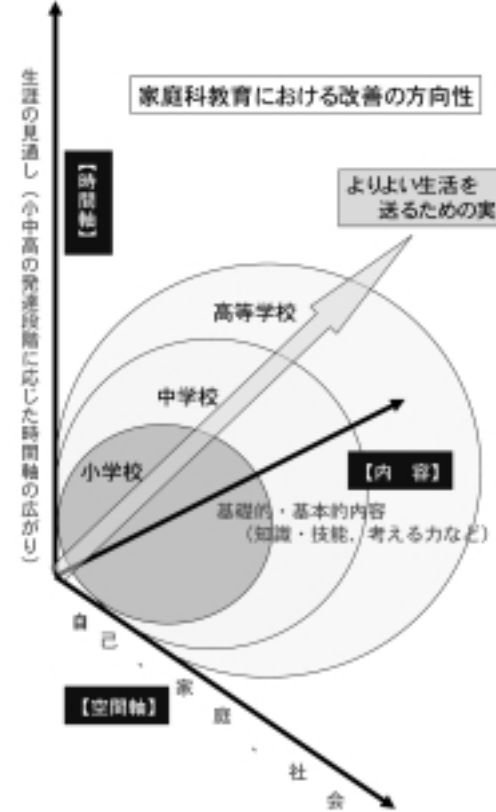
【目標・内容について】

自己と家庭、家庭と社会とのつながりを重視し、生涯の見通しをもって、よりよい生活を送るための実践力を育成する視点から、学校段階に応じた体系的な目標や内容を検討してはどうか。

この改善の方向性については、「自己と家庭、家庭と社会とのつながり」という空間軸と、「生涯の見通しをもって」という時間軸を踏まえ、子どもの発達段階に応じて、よりよい生活を送るための実践力を育成する視点から、改善を図ることとしている。

このことは、先に述べた「人間力」の育成とも関係が深く、さらに、この視点を、小学校、中学校、高等学校の発達段階ごとにとらえると右図のようにイメージできる。

図に示したように、時間軸と空間軸の視点を踏まえ、矢印の方向に向けて子どもの力を伸ばす指導を行うことが、「よりよい生活を送るための実践力」を育成することとなり、21世紀を生きる子どもたちの豊かな生き方を支えることになると思われる。



4. おわりに

少子高齢化の進展、家庭の教育力の低下など、社会の変化の中で、家庭科教育においては、上記の視点の他に、家族・家庭に関する教育や幼児触れ合い体験などの充実、健全な食生活のための食育の推進、社会において主体的に生きる消費者を育むための教育の充実などが求められている。

これらの課題に対応できる新しい家庭科教育の創造のため、子どもたちの指導に直接関わっている先生方とともに、力を尽していきたいと考える。

【参考文献】

1) 中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」、平成16年9月6日

**【特集】
「人間力」の向上を
めざして**

上野
耕史

「人間力」育成における

技術分野の役割



ウエノ コウシ

1962年栃木県生まれ。宇都宮大学大学院教育学研究科修了。栃木県の中学校教諭、栃木県教育委員会義務教育課指導主事を経て、現在、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官・科学省初等中等教育局教育課程課・参事官付教科調査官。

1. はじめに

本号の特集は「人間力の向上をめざして」とのことである。現在行われている中央教育審議会において「人間力」という考えが出された理由は、「現実の社会で大人がどのように生き、そこでは何が必要とされているのかを示すことで、学ぶことの意義を子ども達に伝え、学ぶ目的を明確化する」ことにある。そして、このような考え方を踏まえて、中教審教育課程部会「家庭、技術・家庭、情報専門部会(以下「専門部会」)」においても意見交換がなされていることから、本稿では、専門部会における技術分野に対する指摘を紹介し、「人間力」育成における技術分野の役割を考えていくことにする。

2. 専門部会における指摘

(1) 「ものづくり」を支える能力や技能、態度の育成

専門部会では技術分野に対して、「ものづくりの経験が、計画通りに進める力、ものをうまくつくる力、構想を実現する力などを育てる。」「日本のものづくりの良さを支えてきた創意工夫して改善を図る能力、緻密さへのこだわり、自分の仕事に対する責任感といった能力、技能、態度を育成する必要がある。」といった、情報も含めた「ものづくり」を支える力を重視すべきであるという意見をいただいている。これは、現在の社会が技術の恩恵を受けつつもその事実気付けない、つまり技術が目に見えない状況になっている中、日本の産業の特徴の一つである「ものづくり」や「技術開発」といったことについて、義務教育段階ですべての生徒に対し経験させ、さらにそれらを支える基本的な能力を育む必要があるという指摘と理解できる。

(2) 技術を評価・管理できる能力の育成

一方、「生活者としての技術を教えることはあっても、科学技術のガバナンスを教えるこ

とはなされていないなど、主権者としての国民を育てるという観点の教育がなされていない。」といった批判や、「科学が発達し様々な技術が活用される社会において、科学技術と社会とのかかわりについて、安全、リスク等の問題も含めて理解させること、ものづくりなどを通して技術を適切に評価し、管理できる力を育てることが重要である。」との指摘もいただいている。

ここで出された「技術を適切に評価し、管理できる」とは、「技術と社会は相互に影響する双方向的関係にあり、技術を適切に評価し活用できる市民はよりよい技術の発達を促すという意味で技術を管理できる」ということを指している。例えば、携帯電話の普及により国民一人一人の生活が変わるだけでなく、年賀状の発売数が減少するなど、技術の発達が日本の文化や社会の在り方までも変えてしまうことがある。一方、携帯電話には使用者が求める音楽、テレビ等、多様な機能が追加されている。このように、広く一般の方から支持される技術はその発達が促されるのである。

科学が自然を理解することを目的とするのに対し、技術は人間の欲求の充足を目的としており、当然自然に全く影響を与えない技術はありえない。また、どのような技術にも意図していない副次的な影響が生じる可能性はある。そして経済性なども含めた様々な条件の中で、現在最適な解を見いだすことが技術の考え方である。このような技術の特徴を理解し、現在の条件の中でどのような技術を使うべきなのか適切に評価し活用することができる能力、活用しようとする態度はよりよい技術を適切に管理できる能力につながる。

先の中教審の意見は、これらの能力が持続可能な社会の構築が求められる現在、つまり技術の恩恵を受けずに生活することのできない現在の社会において、また、新たな技術が生まれてくる将来の社会において、すべての

国民に必要な力であるということを指摘しているのである。

3. おわりに

このように、技術分野には、大きく2つの要求がなされており、これらの能力等の育成が「人間力」育成の中で技術分野が担うべき役割と考えられる。そして、実は専門部会で指摘されていることは現在の学習指導要領でも重視されているものなのである。(例えば解説書の内容A(1)の部分を参照していただきたい。)

私はよく「のこぎりを学ぶ」とともに「のこぎりで学ぶ」ことも大切にしていきたいとお願している。この「のこぎりで学ぶ」ことの中に専門部会で指摘された様々な能力や態度が含まれる。のこぎりの仕組みについて学んでいない生徒は、作業においてそれを生かすことの必要性を認識できない。加えて、仕組みを生かすことなく道具を使ってしまった生徒は、道具に込められた先人の知恵の価値に気付くこともなく、ましてや、その知恵が、社会においてもどのような価値を持つものなのか考えようとししないのではないだろうか。

限られた時間の中、また、生徒の生活経験も変化している中、先に述べたような指導は困難かもしれない。しかし、単に道具の使い方、ソフトの使い方だけを伝える授業は「人間力」育成のために、技術分野としての役割を果たしているとは言えないことを理解していただき、これからの社会で求められる能力等の育成を目指した授業の実践に努めていただくことをお願いしたい。

調理実験から始まる「人間力の向上」

～調理実験・調理実習・家庭実践を通して～

沖縄県沖縄市立コザ小学校 岸本 トモ子

1. はじめに

給食時間になると好きな食べ物と苦手な食べ物を物々交換したり、好きな物ばかりを食べたり・全く手をつけなくて給食時間を終えたりする光景が気になり始めた。また、家庭において家族揃って食事をしたり、手伝いをすることが当たり前でなくなった昨今、「家庭科」や「給食指導」、「食に関する指導」を通じた関連授業で、人として生きる力をつけさせていきたいと考えた。

2. 研究のねらい

児童が毎日の食事に関心を持ち、食事と成長が関連している視点に気づかせたい。

また、食に関する知識や食事作りの学習において、調理実験を取り入れた授業展開を工夫することで、調理の楽しさを体感させ、必要なときに家庭での食事作りを実践できると考える。

この実践力を「人間力の向上」と考える。

3. 検証の手立てと方法

(1) 手立て

①成長と栄養の働きについての教材作成と指導の工夫をする。

(栄養士とのTT)

②調理実験による調理の楽しさを体感させる指導の工夫をする。

③教材・教具の工夫をする。

(2) 方法

①事前・事後のアンケートを分析し、児童の意識の変容をみる。

②自己評価やキッズシェフ報告会*, 保護者からのメッセージ等で実践態度をみる。

*家庭実践についての学級内での報告会。

4. 指導の実際

(1) 題材別における調理実験

①簡単な調理をしよう

ア 切り方調理実験



(もち粉粘土)

②作っておいしく食べよう

イ ご飯の炊き方



(米の吸水実験も含む)

ウ だし取り実験



③朝食に合うおかずを作ろう

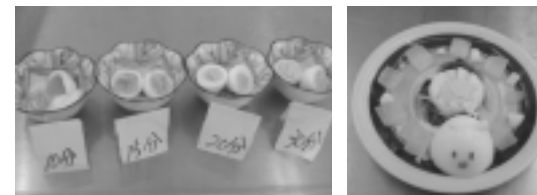
エ ゆでる・炒めるの実験



葉野菜(からし菜)：生と炒めたときのかさの量の違い



根菜(じゃがいも)：切り方による加熱時間の違い



ゆで卵:加熱時間の違いによる変化

児童の作品

(2) 調理実験から学んだこと

ア 切り方調理実験(もち粉粘土)から食材の切り方に興味を持ち、サラダの種類や料理によって切り方が違うことを発見することができた。

イ 社会科の学習で稲作を体験して米を収穫した。米の吸水実験では米を水につける必要性を知り、各家庭の米をおいしく炊く秘訣を話し合い、ガラス鍋で炊く。固い米がご飯になる様子を観察する。米を育てて食する過程を体験したことで、給食のときにも1粒残さず食べるようになってきて、感謝の気持ちを表現することができた。

ウ だし取り実験では、地元でとれる特産物のもずくからだしが取れるか推測する。昆布、煮干し、だしの素、かつおぶし、しいたけの6種類で味比べをしたあと、児童が「家では混ぜて使うときもあるよ」の言葉から2種類のだしを混ぜてオリジナルブレンドだしを考えたり、各家庭のだしの取り方が違うことに気づくことができた。

エ ゆでる、炒めるの実験では、生の葉野菜とのかさの量を比べることで、食事するときに野菜をたくさん摂れることや、根菜は切り方によって加熱時間が違うことに気づいた。このことより葉野菜の使い方や調理の仕方を工夫することができた。



ご飯とみそ汁

1食分

児童の作品

5. 成果と課題

(1) キッズシェフ報告会での成果

- ・学校で習ったので簡単に作ることができた。
- ・「おいしい」って言われたので、家族のためにまた作りたい。
- ・豚骨でだし取りをした。

(2) 児童のアンケートからみえた成果

- ・「調理する事が好きですか」の問いに、事前の77%から92%に増えた。
- ・「食事作りの手伝いを進んでしますか」の問いに、事前の54%から73%に増えた。
- ・休日や長期休業日を利用して、26人中24人の児童が家庭での食事作りを実践した。

(3) 保護者のアンケートからみえた成果

- ・野菜を好き嫌いせず、いろんな料理を作っていききたいと思います。
- ・時々食事を作ってもらいます。
- ・家族のために作ることが嬉しいと思えることは最高だと思います。
- ・食べることはすばらしい！作ることはもっとすばらしいよ！

授業を通しての保護者とのTT指導や、授業での様子を家庭科通信で知らせることにより、保護者の食事作りに対する意識が変化し、児童の実践しやすい環境になったと思われる。

<課題>

- ・保護者の協力を得られない家庭への手立ての仕方

6. おわりに

調理実験を多く取り入れることで、児童の変容の様子が食事作りや家庭での手伝いの中にもみられた。

「調理実験から始まる人間力の向上」とは、児童が家庭科の学習の中から興味・関心を持ち実践することであると捉える。教材や調理実験の選択、教師と保護者が協力して多面的な環境を作ることで、生きていく上で児童自らが日常生活での必要性を感じ、実践できるようになることが、「人間力の向上」につながるものではないかと実感した。人との関わりの中で感謝「食」から学ぶ学習を伝えていける教師の一人として、これからも工夫しながら実践していきたい。

地球温暖化を取り上げた電気の学習

山形県鶴岡市立藤島中学校 佐々木 俊和

1. はじめに

地球温暖化は今、世界的に大きな社会問題になっている。わが国でもバイオ燃料を利用するなど、CO₂を減らす開発が進められている。発電においても、これから変化が見られそうである。私はインターネットを利用した調べ学習をしている中で、石油はそのまま消費し続けると40年後になくなってしまふことを知った。火力発電が主となっている日本の発電は、これからどうなるのだろうと思った。そこで、毎年行っている田川地区(鶴岡市・庄内町・三川町)の技術科教員の研修会で、東北電力の方から「これからの発電」というテーマで、講演していただくことになった。その講演によると、環境と資源のことを考慮して、現在の日本の総発電量の3割を占めている原子力発電が、今後5割まで増加するであろうという話だった。講演を聴き、これから環境を守りながら生活を維持していかなければならないことの必要性を生徒に伝え、考えさせなければならぬと思った。

2. 講演で聴いた主な内容

講演で取り上げられた地球温暖化に関連した内容は以下の通りである。

- ・石油を燃料にするとCO₂が大量に出ることと石油が少なくなってきていることから、火力発電に石油は使われなくなってきている。
- ・天然ガスはCO₂の量が比較的少ないため利用されている。
- ・原子力発電はCO₂を出さない。資源としても、再利用も可能でこれから長く使っていける見通しがある。フランスでは8割を原子力発電でまかなっている。近い将来、日本でも5割を占めるであろう。

このほかにも、原子力発電の安全性の話や各国の発電の様子を見学してきた話などがあり、大変興味深い講演だった。

3. 具体的な実践

(1) 発電のしくみを知る

発電に興味を持たせるために、まず図1のような簡単な装置を利用して、電気が作られるしくみを説明する。

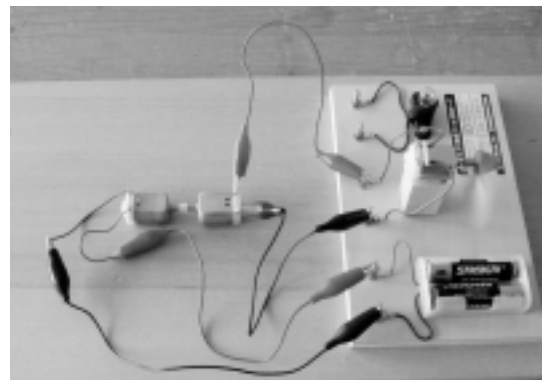


図1 モータを使ったモータ発電実験

これは乾電池を1番目のモータにつないで、そのモータと2番目のモータをピニオンギアでつなぎ、2番目のモータとプロペラのついた3番目のモータをつないだものである。「これをつなぐとプロペラは回るのでしょうか？」と質問すると、生徒はみんな「回る。」と答える。つないでみると実際に回る。でも、このとき生徒達はどんなことが起こってプロペラが回っているのかは気づいていない。そこで、「1番目のモータは、乾電池の電気で回っていますね。2番目のモータは、1番目のモータが回っているのと一緒に回っていますね。では、3番目のモータはなぜまわっているのですか？」と聞くと、しばらく考える。そこで、乾電池と1、2番目のモータをダイナモ式ラジオの教材のダイナモ装置と取り替える(図2)。そして、ハンドルを回すとプロペラが回り出し、生徒からは「オー」という歓声が沸く。ここで、生徒達は乾電池がなくてもモータが回ることに気づき、モ

ータを回すことで電気が生じることを理解する。このあと教科書を見て、タービンをどのような方法で回すかで、いろいろな発電方法があることを説明する。

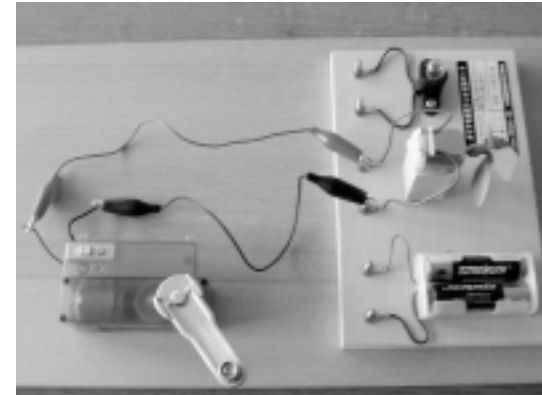


図2 手動式ダイナモ装置を利用した発電実験

(2) 地球温暖化の問題を知る

生徒は地球温暖化という言葉は聞いたことがあるが、実際にどんなことが起きているのか、どんな対策が必要なのか知らない生徒が多い。そこで、石油が40年後(生徒達がまだまだ元気なうち)になくなってしまふかもしれないことを話し、「火力発電が石油でできなくなってしまったらどうなるのだろうか?石炭、天然ガスにも限りがある。資源がなくなって、発電できなくなったら、私たちの生活はどうなるのだろうか?」と聞く。そうすると、「石炭、天然ガスはどのくらいあんな?」とか、「昔の生活に戻ればいあんな。」とかでてくる。そこで、実は石油を燃やすとCO₂が大量に排出され、そのCO₂は地球温暖化の原因になっていて、今は火力発電に石油が利用されなくなってきていることを話しする。そして、地球温暖化がどんなことを引き起こしているのか、インターネットで調べさせる。そうすると、南極や北極の氷が融け始めていることや、海面が上がって低い島がなくなってしまうことなどに気づく。

(3) 発電をテーマにして調べ学習を行う

地球温暖化はCO₂の排出が主な原因となっており、東北電力の方の話によれば、環境や資源のことを考えると原子力発電が今後増えていくことに

なりそうだという話をする。これから発電はどうなっていくことが望ましいのかを考えながら、発電をテーマにして、インターネットを利用して2時間の調べ学習を行う。B4プリント1枚以上にレポートをまとめさせる(図3)。発電に関することであれば何でもいいことにし、資源について調べたり、原子力発電のことや風力発電のことなどいろいろでてくる。レポートの最後には調べてみての感想を入れさせた。



図3 生徒のレポート

4. おわりに

レポートを見ると、生徒は発電と環境への影響に視点を向けていた。どの発電が環境にやさしく、どの発電が環境に害を与える影響が大きいのかに関心を持っていた。環境を守るために自分たちにできることを考えて、感想を書いている生徒もいた。また、このたびマヨネーズの値段が何年かぶりに上がったというニュースも、バイオ燃料の話との関わりから生徒達は興味を持ち、値上がりにも納得していた。このように、この学習を通して、これから私達は環境を守りながら生活を維持していかなければならない必要性を、生徒達は考えることができたと思う。

東北電力の方の講演を聴いて、発電への興味が深まり、生徒にもよく考えさせたいという思いを持った。地球環境のことを自分で調べてみるのも大切であるが、関係の方に話をさせていただくことはとても有意義な研修となった。もしも、他の地域でも技術科の自主的な研修会などがあれば、このような研修もいかがだろうか。

学習した技術を生活に生かす力を育む授業

～文書処理ソフトウェアの実践を通して～

神奈川県川崎市立西中原中学校 望月 隆

1. はじめに

家庭におけるパーソナルコンピュータ(以下、パソコン)の普及が進み、本校においても普及率は89%に上る。それに伴い自宅でパソコンを扱う生徒の数も増えてきており、小学校卒業までに家庭でパソコンを使用した経験のある生徒は83%に上る。

しかし、使用する内容に注目してみるとインターネットにおけるwebページ閲覧やゲームの利用が中心であり、情報を処理したり活用したりする能力については、まだまだ育成していく必要性があるといえる。

そこで本研究では、学習した内容を生活に生かす力を育むことをねらいとし、次の内容を実践してみた。

- ①学習する内容に対して、目的意識をもたせる。
- ②生徒の興味・関心を喚起し、持続させるために、視聴覚教材を活用する。
- ③授業ごとに感想用紙を記入し、生徒の中にある思いを意識化していく。

2. 実践例

(1) 題材の内容

第1学年「身の回りにある情報を処理しよう」

・文書処理ソフトウェアの利用(4時間)

「目標の掲示物をつくらう」

最初の小題材である文書処理においては、コンピュータ嫌いの生徒をつくらないために、文字入力が必要な生徒でも気軽に取り組める内容が必要である。そこで、入力する文字量を最小限にとどめ、ワープロソフトの機能を活用し、掲示物を作成することを目指した。

ワープロソフトはマイクロソフト社のWord 2003を使用し、ワードアート・クリップアート・オートシェイプの機能を重点的に指導し、カラーレーザープリンタで印刷して掲示物を作成した。

(2) 実践した内容

①目的意識をもたせる

本校は生徒会や学校行事で目標を立ててから活動することが習慣化しており、屋上をはじめさまざまな場所で目標やスローガンの掲示物を目にする(図1)。1年生も入学時にクラス目標や個人目標を設定するが、入学から約3ヶ月が経過する頃には入学当初の緊張感は無くなっていく。そこで、学校生活を見直して自分の目標を立て直し、掲示物として作成することで学校生活への意識を高めたいと考えた。作成した掲示物は完成後に教室に掲示することを伝え、作成する目的を明確にした。



図1 校舎の掲示物

②視聴覚教材を活用する

授業の導入においては、校内のいろいろな場所に掲示されている目標やスローガンを撮影していただいたものを、大画面のディスプレイに転送しクイズ形式で提示した(図2)。

さらに、作成方法の示範では先生機の画面を生徒機に転送し、簡単に見栄えのある作品ができることを確認した。また、授業の最後には作成途中の生徒作品を生徒機に転送し、感想を交流することで、学習意欲の持続と向上を目指した。



図2 授業の様子

③感想用紙を記入する

授業のたびに、生徒の中にはいろいろな気づきや思いが出てくる。それを感想用紙に記入していくことで、自分の気持ちを明確にしていくことができるはずである。何となく「授業が楽しかった」という段階から、「もっとやってみたい」と感じさせ、文字にすることで意識化できれば、生活に生かす力につながると考え、授業ごとに感想を書きためていった。

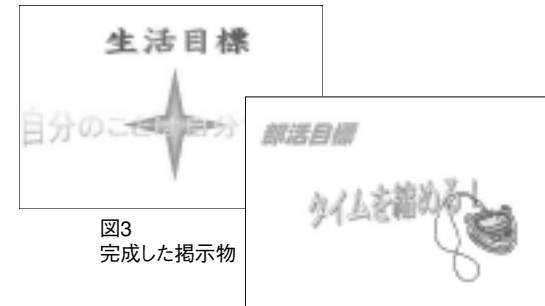
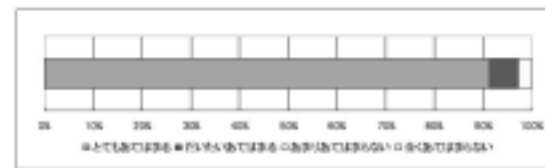


図3 完成した掲示物

(3) 学習後のアンケートから

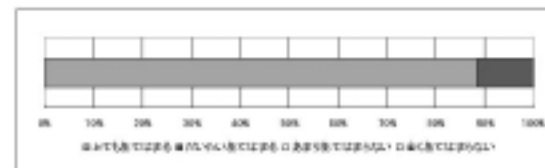
学習後の生徒にアンケートをとった結果、次のようになった。

①コンピュータの学習は楽しかった



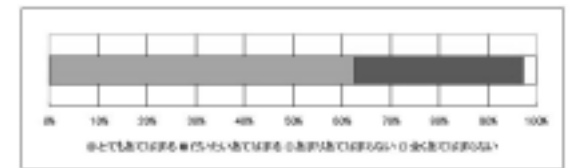
この質問に対しては、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と答えた生徒が97%に上り、ほとんどの生徒が楽しかったと感じていることが分かった。

②コンピュータで作品をつくることに興味をもてた



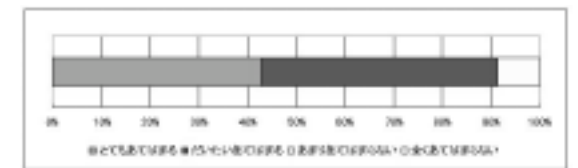
この質問に対しては、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と答えた生徒が100%に達し、コンピュータでの作品づくりへの高い関心が読みとれた。

③ワープロソフトを利用することに興味をもてた



この質問に対しては「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と答えた生徒が97%に上り、ワープロソフトの利用への関心も高まったことが分かった。

④ワープロソフトを生活でも利用したいと思った



この質問に対しては「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と答えた生徒が91%に上った。学習前には「利用したい」と答えた生徒が36%だったことから、本実践のねらいとした「生活に生かす力を育む」という意味でも成果がみられたと考えられる。具体的に作成したいものを尋ねてみたところ、手紙や招待状という回答が多く見られた。

3. おわりに

本実践は、4時間の小題材である文書処理の学習にすぎないが、アンケート結果などを見ると、一定の成果を残せたと考えている。

この実践は特別に目新しいことを行ったわけではなく、これまでの指導内容を見直し、生徒の情意面に働きかけるように少し工夫しただけである。

教師が視点を生活に向けて指導内容を少し変えることで、生徒の視点も変わっていくことが感じられた。この後に続く図形処理や表計算処理においても、同様の働きかけを行うことでさらに生活に生かす力を育てていきたいと考えている。

【参考文献】

中村祐治他編著『これならできる 授業が変わる 評価の実践』開隆堂,2006年

基礎的・基本的な力をつけ、生活者としての眼を養う授業づくりの工夫

～「万能ラッピングツール ふろしきを作ろう！」(2年生実践)を通して～

愛知教育大学附属岡崎中学校 伊奈 希依子

1. はじめに

「人間力」は現行学習指導要領の「生きる力」を発展させた力である。その中身は「確かな学力」の確立、「社会的自立」の推進、「社会の変化」への対応という3つの視点をもっている。本単元は衣の学習における基礎的・基本的な力をつけると同時に、環境に配慮した生活をしていこうとする態度を育成することをねらいとしている。

2. ふろしきの魅力と教材としての価値

文献によると、ふろしきは古くは奈良時代から登場する。名前は「ひらづつみ」といったが、正方形の布で仏教のだいじな装束を包んで保管していた。江戸時代になって庶民の間で風呂(銭湯)が流行すると、風呂場で敷いて使ったことから「ふろしき」という名が一般的になり、ふろしきは包むだけでなく、持ち運ぶために使われるようになった。以来、ふろしきは日本人の生活用品として欠かせないものとなった。しかし、昭和40年代の高度経済成長期を迎えてからはこれに代わってポリエチレン袋(石油から作られている)が重宝がられるとともに、それぞれの収納物の形に合ったかばんが用いられるようになった。こうしてふろしきはあまり使われなくなってしまった。

平成17年、当時の環境大臣(小池百合子氏)が「もったいないふろしき」をプロデュースし、ふろしきはいろいろな大きさや形のものを1枚で包み運ぶことができる、使わないときは小さくたたんで収納できる、何度も繰り返し使える、といった長所をアピールした。これをマスコミが取り上げたことから、今またふろしきに注目が集まり始めている。

ふろしきを製作することで、布地の性質、手縫いの基礎、アイロンのかけ方等の衣の学習の基礎・基本的内容をおさえることができる。加えて、ものをだいじにしてきた日本人の「包む」文化にふれたり、消費社会と生活様式のかかわりを考えたり、環境にやさしい生活について学んだり

することができ、これは生活者の眼を養うことにつながると考えられる。

3. 単元構想表<12時間完了>

学習活動と教師の手だて	学び
ふろしきとの出会わせ<3時間> ①ふろしきの包み方の例示 ②「もったいないふろしき」の提示 ③未仕立てのふろしき生地1人1枚配付 ④日常生活で③のふろしきを使ってみる体験活動(1週間)	ふろしきの歴史 日本の包む文化 循環型社会 ふろしきの包み方
どのような生地にするかの追究<3時間> ⑤多様な追究方法(取材・実験・調査等)の保障 ⑥個人で追究したことの学び合いの場の設定	組成表示 取り扱い・絵表示 布地の性質
MYふろしきの製作<4時間> ⑦三つ折りにしてまつり縫いする例示 ⑧③のふろしき生地を使ったまつり縫いの練習 ⑨縫い方のコツや工夫を学び合う情報交換の場の設定	手縫いの基礎 まつり縫い 縫いしろのしまつの必要性 アイロンの使い方
MYふろしきの発表会<1時間> ⑩MYふろしきで実際にものを包み、感想を伝え合う交換会の設定 ⑪環境省廃棄・リサイクル課の笹木さんとの交流の場の設定	環境にやさしい生活 3R
学びのふりかえり<1時間> ⑫学びをふりかえるための話し合い場面の設定 ⑬単元まとめの記述	生活者としての眼

4. 授業の実践 ※枠内はS子の授業日記より抜粋

(1) ふろしきってすごいな。ボールも包めるんだね

ふろしきで箱、ペットボトル、ボールを包んで見せた。生徒は何でも包んでいく私の様子を見て、驚いていた。次に、「もったいないふろしき」(環境省から借用)を見せ、近頃ふろしきが注目されている理由を考えさせた。

今日、色々なふろしきを見てみて、大きさや形が違うものでも何でも包むことができるので、とても便利なものだと思います。きれいに見えるふろしきの包み方を覚えておきたいと思いました。
「もったいないふろしき」はちょっとデザインを変えた方がいいと思いました。でも、日本の文化を見直すために新しいガラを考えてアピールしようとしたのかなあ。



ふろしきに興味を示し始めた生徒に、未仕立てで上下が切りっぱなしのふろしき生地(約90cm)を1枚ずつ渡し、1週間使ってみよう投げかけた。



学校でファイルなどを包んでみて、包み方によっては持ち運びは便利だと思ったけれど、包むのとはどくのが少し大変かなと思いました。だけど、かわいい包み方などを知れば、包むのもまた楽しみになるかなと思いました。

(2) もっとみんなが使いたくなるようなふろしきを考えて作ってみたい

生徒はふろしきを使いながら、その便利さを実感した。「便利なものなのに、なぜ今は使われていないの?」と聞かけると、生徒はデザインや色がよくないことや結んだりほどいたり面倒なことを理由としてあげた。一方、もっとみんなが使いたくなるようなふろしきを作れば、ふろしきはまた使われるようになるにちがいないという意見から、私たちが持ちたくなるMYふろしきを作りたいという思いが高まっていった。

私はいっそのこと、ふろしきをふろしきとして使わなくてもいいのではと思いました。N君が毛布としても使えたと言っていたので、布をタオルみたいなものにしてみれば、もっとみんなが使いたくなって流行ると思います。でも、昔のようなガラなどではいけません。今日の話し合いで出たようにデザインがかわいかったり、環境によかったりしないと!

こうして、生徒は各自の追究を経てオリジナルのふろしきを製作することとなった。

(3) 布端のほつれを何とかしなくては。まつり縫いの仕方をおぼえてMYふろしきを作ろう!

配付したふろしきは何度も使ううちに始末していない上下の布端がほつれ始めていた。

私は先生がくれた青いふろしきは移動教室の時にファイルやふでばこなどを包んで使いました。普通に包んだ後で布をねじって取っ手を作る包み方でやっていたら、布のすみから糸がいっぱい出てきて大変でした。何とかしたいと思っていたら、今日の授業で端を三つ折りにしてまつり縫いで、すっきりしました。布はタオルがいいと思って家で探しました。でも、ふかふかした肌ざわりのタオルはふろしきとして包むには合っていないので、もっと薄いタオルを探したら、白いのしかなかったんで、あきらめました。でも、ネットで探したら

見つけました!ベビー用品を作るのに使われる布なので、いいと思って取り寄せました。届いたのはタオルというよりガーゼの感じでした。でも、これでイケル!と思います。いよいよ作ります!



▲S子の完成したMYふろしき

(4) みんなはどんなMYふろしきができただのかな

「もったいないふろしき」をPRしている環境省から笹木さんをお迎えし、MYふろしきを見て意見をいただくことにした。



みんなが作ったふろしきは工夫があって、おもしろかったです。R君の防災加工がしてあるカーテンで作ったのは避難するときに中の物が燃えないし、避難してからはポンチョになると知って驚きました。

(5) 今回の学びをふりかえってみよう

授業でふろしきの使い方(包み方)や歴史もわかったし、実際に自分で使ってみたことで、ふろしきの良い点だけでなく、短所も知ることができました。それに、MYふろしきを作ったことで、どのような布地が一番使いやすいか、どのようなガラが多くの人に使ってもらえるかを自分なりにしっかり考えることができたと思います。笹木さんのお話を聞いてスーパーの袋が環境にどれだけ影響しているかということがわかり、ふろしきの授業自体はおわってしまうけれど、私たちが授業でやってきた成果を発揮するのはこれからじゃないかなと思いました。スーパーの袋を断り、ふろしきで袋の代用をする、たったこれだけのことが、私たちのふろしきを広めるいいチャンスと思いました。

(太字は「生活者としての眼を養う」につながる学びの成果。)

5. おわりに

技術・家庭科の授業で養われた人間力はその単元がおわった後でも高まっていく。S子が述べているように、日々の生活の中でおりにふれ考えていたり、実践したりしていくことで学びが深まるのである。今後も、生徒の生活の中から教材を見つけ、生活に生きる授業づくりをしていきたい。

教育情報

中教審の専門部会では学習指導要領の改訂に向け、以下のように学習内容の改善を検討しています。

(小学校家庭科)

現行の4つの内容を、①自分の成長と家庭の仕事、生活時間などの家庭生活と家族に関する内容、②食事のとり方や調理の基礎などに関する内容、③衣服の着用と住まい方、製作の基礎などに関する内容、④金銭の使い方や物の活用など身近な生活と消費・環境に関する内容等の観点から再構成する。また、2学年間の学習の見通しをもつことができるようにガイダンス的な内容を設定する。

(中学校技術・家庭科 技術分野)

技術が活用される社会に対応する視点から技術を、①材料や加工、設計などに関する技術、②電気エネルギーの変換と効率や動力伝達と損失などに関する技術、③作物の栽培や新しい生物資源の活用などに関する技術、④

ネットワークやマルチメディア、プログラミングによる計測・制御、情報モラルなどに関する技術等の観点から整理し、すべての生徒に履修させる。また、学習の見通しを立てさせるガイダンス的な内容を設定する。

(中学校技術・家庭科 家庭分野)

生活の自立を図る視点から内容構成を見直し、①家庭の基本的な機能や幼児の生活と家族などに関する内容、②中学生の栄養と献立、日常食の調理などに関する内容、③衣服の選択と手入れ、住居の安全、衣生活と住生活の工夫などに関する内容、④消費者としての自覚や環境に配慮した生活の工夫などに関する内容等の観点から再構成し、すべての生徒に履修させる。また、学習の見通しを立てさせるガイダンス的な内容を設定する。

図書紹介

人間力を高める情報教育

高度情報通信社会における
～情報・メディア・コミュニケーション～

本村猛能 山本利一 森山潤
角和博 工藤雄司 共著
学術図書出版/定価2,100円(税込)

平成14年8月、文部科学省は「新しい時代を切り拓くたくましい日本人の育成」と銘打った人間力戦略ビジョンを打ち出した。また、内閣府を担当部局とする人間力戦略研究会は、そこでの議論を「人間力戦略研究会報告書」としてまとめた。以来、「人間力」という概念が人材育成の基本的ビジョンとして、多方面で提唱されるようになる。

ここで取り上げた図書「人間力を

高める情報教育」は、その意味からすると、情報教育を推進する立場に立つ筆者らからの、これらの課題に対する解答書と言ってもよいであろう。

タイトルである「人間力」について本の序章では、「新しい義務教育では、教師や学校の教育力の充実の中で、学習者である児童・生徒の人間力が養われるもの」としているが、これは高校や大学でも同様であろう。人間力は学校教育のみならず地域や教育行政機関、産業との連携、すなわち「信頼と連携のシステム」が大切であり、今回の教育改革は人間力向上のための改革であるともいえる。その具体的な推進課題として、特に「確かな学力」「豊かな心の育成と倫理観」、「文化芸術立国」などは、教育基本法と密接な関連性を持つ情報教育を通して、改革の目標の一助になるのではないかと述べている。「人間力戦略研究会報告書」がいかにも概論的なまとめであったことに対し、本書が情報教育の立場から具

体的な教材や指導のあり方、その考え方を提案しようとしたものである。

本書は、情報・メディア・コミュニケーションの本質、問題解決と意志決定、情報モラル教育と情報倫理など、情報と人間の係わりを常に視野に入れた構成となっている。問題解決と意志決定の章では、問題解決へのアプローチと問題解決過程におけるメディアの役割と活用方法が分かりやすく整理され、「情報とコンピュータ」や教科「情報」を指導する指導資料として有益である。

第6章では体系的な情報教育のあり方を踏まえ、社会構成主義などの学習理論に基づいた「人間力を高める情報教育」とは何かについて考察を進めている。

情報教育を支える学習理論と今日的キーワードである「人間力の育成」の係わりについて、考察しようと考えている人には、一読されることをお勧めする。

本郷 健

(大妻女子大学 教授)

ブックレットシリーズ 生活をつくる(作る・営る・ 創る)家庭科 1～3巻

日本家庭科教育学会 編
ドメス出版/定価 各1,050円(税込)

日本家庭科教育学会創立50周年の記念事業の一つとして本年6月に刊行されたもので、第1巻『個人・家族・社会をつなぐ「生活スキル」』/第2巻『安全・安心なくらしとウェルビーイング』/第3巻『実践的なシテイズンシップ教育の創造』の3冊からなる。

各巻とも、「なぜ、今、家庭科で〇〇なのか」の理論編と、「〇〇の授業を読み解く」の実践編の2部構成で、家庭科が現代の教育課題に応える教科であることをわかりやすく、家庭科教育の内外に向けて発信している。
(編集部)